

絵図・地図からみる竹島 - 韓国側の史料を事例として -

船杉力修（島根大学法文学部・歴史地理学）

1. はじめに

本報告は、韓国側の絵図・地図を用いて、歴史地理学の立場から、竹島（韓国名、独島）の記載について検討を行なうものである。

従来、絵図・地図からの竹島の検討については、主として日本側の資料を中心に考察されてきた（川上、1966 など）。しかしながら客観的な考察を行なうためには、日本側だけでなく、韓国側の資料もふまえ、検討する必要がある。韓国側の資料を用いた主な研究は、塚本孝（1980）と金学俊（2004）がある。塚本の分析（1980）では、韓国側の主張としては、于山島を竹島（独島）としているが、于山島が古地図にどのように記載がなされているかということに注目した。その結果、絵図では、2つのタイプがあり、まず（A）として、于山島を鬱陵島の西側（朝鮮半島と鬱陵島の間）に描いているものがあり、（B）として、于山島を鬱陵島の東側（朝鮮から見て外側）に描いたものがあるとしている。（A）の事例としては、『新增東国輿地勝覧』所収の「八道総図」があるが、鬱陵島の西側に竹島（独島）があるのは古い時代の地図とはいえず奇異と言わざるを得ず、鬱陵島それ自体を誤って2つ描いたとしている。また『朝鮮写古地図帖』所収の「八道総図」では、鬱陵島の西側に「于山」の記載があるものの、「于山」の表記は「江原道」、「慶尚道」と表記と同じように、四角で囲んで記載があることから、島としての記載ではなく、「于山国」としての記載であるとしている。（B）の事例としては、『朝鮮輿誌』所収の「鬱陵島図」のように、鬱陵島の東側に于山島を描いているが、これは現在の竹島ではなく、鬱陵島の北東1海里（1.8km）に位置する属島、竹嶼であるとしている。

一方金学俊（2004）は、『新增東国輿地勝覧』所収の「八道総図」では、鬱陵島の西側に于山島を描いており、地図で誤った表記をしているが、これは地図製作の未熟であったためであり、現地に直接行って見なかった文官たちが地図製作をしたためである。しかし地図では2つの島があることから、ともに朝鮮領であること、そして2つの島は天気が晴ればはっきり見え、風が穏やかならば2日で到達できる、ということをも明らかにしている。さらに、朝鮮後期に製作された他の地図（朝鮮図）でも、「東国地図」（1700年代初、鄭尚驥）、「海左全図」（1822年）、「朝鮮全図」（1846年、金大建）郡県別地図である「輿地図」（肅宗17世紀後期～英祖18世紀前期）において、于山島を鬱陵島の東側に正確に描いており、朝鮮の領土であることを明確にしている、としている。

「八道総図」など同じ絵図を対象として分析しているにもかかわらず、両者の見解が異なるのはなぜであろうか。果たして両者の見解は妥当であるのか、検討が必要である。両者の見解を検討するためには、絵図を悉皆的に整理・検討する必要があると思われる。従来の研究は、先にも述べたように、日本側の絵図・地図の検討がほとんどである（日本側、そして欧米系の絵図・地図の分析については、別の機会に譲りたい）。これまでの研究では、自国にとって都合のよい資料を並べ、都合の悪い資料は並べない傾向がみられた。客

観的な研究を進めるためには、日韓にとって都合がよいかどうかではなく、資料を悉皆的に調査・検討する必要がある。最近歴史地理学では、朝鮮の古地図について、研究の進展がみられる（楊普景・渋谷鎮明、2003・楊普景、2003 など）ので、こうした研究成果をふまえ、考察する必要がある。また最近の研究では、近代的な測量による地図作成以前の古地図全般を指す「絵図」は、作成された当時の地域像、世界観を反映していることが注目されている。したがって、絵図の不正確さに注目するよりも、作成された当時の地理認識について注目し、分析を進めることとしたい。さらに、文献資料と絵図資料との関係である。韓国側の分析では、文献資料にみられる于山島＝松島（現在の竹島）という記載を前提にして、絵図の分析・考察をしている傾向がみられる。しかし、こうした先入観は絵図の情報を恣意的な解釈する可能性が出てくる。本報告では、絵図資料で特に于山島が絵図・地図上でどのように記載されているかに注目し、朝鮮では于山島がどのように認識されていたかについて、検討を行なうこととする。

資料として主に使用したのは、李燦『韓国の古地図』（韓文）（汎友社、1991年）である。韓国国内に所蔵される朝鮮王朝時代を中心にした絵図を、系統的に紹介したものである。これによって、時代を通じて、鬱陵島、于山島についての記載を検討することができる。この本を編集した李燦は、ソウル大学校師範大学地理学科を卒業し、ルイジアナ州立大学校大学院で碩士（修士）・博士学位（地理学）を取得し、ソウル大学校師範大学・教育大学院・社会科学大学教授を歴任し、大韓地理学会会長、韓国科学史学会会長、社団法人韓国測地学会会長などを歴任した、韓国を代表する地理学者の一人である。分析の結果は表としてまとめた。

2. 韓国古地図にみる鬱陵島・于山島

1) 15・16世紀

鬱陵島が最初に記載された絵図は、「混一疆理歴代国都之図」【表番号1、以下数字のみを記す】である。これは1402年に朝鮮王朝下で作成されたもので、ユーラシアとアフリカを描いた、いわゆる当時の世界図である。それには朝鮮半島の東側に鬱陵島の記載はあるが、于山島はみられない。したがって、15世紀には鬱陵島の地理的認識はあったものの、于山島はないと指摘できる。

16世紀には、天下図とよばれる世界図が作成された。そのうち、「混一歴代国郡都疆理地図」【2】（16世紀中期）は于山島のみ記載である。鬱陵島の記載がないことから、鬱陵島と于山島とを同一視している可能性がある。さらに「華東古地図」【3】では、鬱陵島・于山島の二島を描いており、于山島を西側、鬱陵島を東側に記載している。したがって、鬱陵島と于山島とを同一視している一方で、鬱陵島と于山島、二島が存在するという認識もあったといえる。しかし位置を検討すると、于山島は朝鮮半島と鬱陵島との間に記載がみられ、実際にその間にはそうした島はみられないことから、地理的混乱がみられたと考えられる。

16世紀中期には、朝鮮全図が刊行された。『新增東国輿地勝覧』所収の「八道総図」【13】は官撰地図で、1530年の成立である。特に韓国側の研究ではよく使用される絵図である。鬱陵島・于山島の二島を描いており、于山島を西側、鬱陵島を東側に描いている。しかし

「八道総図」すべてがこうした記載であったわけではなく、17世紀末期の『天下総図』所収の「八道総図」【19】では、鬱陵島のみの記載であることも注意する必要がある。

16世紀中期の「朝鮮全図」では、鬱陵島・于山島の二島を描いているものの、于山島を北側、鬱陵島に南側に記載している。また鬱陵島を「鬱山島」と記しており、位置だけでなく、島名自体も混乱していたことが指摘できる。なお、その他の絵図、「朝鮮八道輿地之図」【12】や「朝鮮方域之図」【14】では、両島とも記載されていない。また明の羅洪先が作成した『広輿図』に収録された「朝鮮図」【11】でも両島とも記載されていない。

このように、鬱陵島・于山島の存在は認識しつつあるものの、両島の位置は東西だけでなく、南北にもあり、地理的な認識には混乱がかなりみられた。また官撰地図、そして木版として刊行された「八道総図」が、朝鮮国内での両島に関する地理的認識の拡大につながったと考えられる。このように地理的な認識に混乱がみられたのは、1417年に朝鮮王朝が鬱陵島への入島・居住を禁じた「空島政策」を開始したことによって、朝鮮半島東部、日本海に対して、地理的認識が及ばなかったためではないかと考えられる。

2) 17世紀

17世紀には西欧式世界地図が登場する。「坤輿万国全図」【4】は、^{こんよばんこくぜんず}イエズス会宣教師マテオ・リッチが1602年に刊行したもので、ソウル大学校奎章閣所蔵のものは1708年に筆写されたものである。これには両島の記載はない。アジアに進出した西欧人には両島とも地理的認識はなかったといえる。さらに「天下都地図」【5】と呼ばれる万国地図は、原図は1623年のもので、ソウル大学校奎章閣所蔵のものは1770年代筆写されたもので、「坤輿万国全図」を筆写した絵図である。日本海上に「鬱陵」と地名のみを記載している。また原図である「坤輿万国全図」にある日本海（この絵図が「日本海」表記の初見であると指摘されている）を、「小東海」としていることから、筆写の際に、朝鮮半島の地理的認識を新たに書き加えた可能性がある。そして鬱陵島に関する地理的認識があったことが指摘できる。

一方朝鮮全図では、鬱陵島のみの記載の事例が少なくなり、鬱陵島・于山島二島の記載事例が多くなる。位置関係は、16世紀と同様に、于山島（西側）・鬱陵島（東側）の記載と、于山島（北側）・鬱陵島（南側）の記載の絵図がみられた。前者の事例は、「八道総図」の系統であるとみられる。しかし、先に記したように、『朝鮮写古地図帖』所収の「八道総図」【16】では、「于山」の表記は「江原道」などの表記と同じように四角に囲んで記していたことから、島としての記載ではなく、「于山国」としての記載である（塚本、1980）という指摘は重要である。また後者の事例としては、金壽弘の作成による「朝鮮八道古今総覧図」【21】がみられる。金壽弘（1601～81）は、朝鮮朝廷の役職の一つである、戸曹参判を歴任したもので、朝鮮図の発展史上では、地図に歴史的事実を書き込んでいる点が注目されている。両方の事例とも、木版本として刊行されたことから、二島が存在するという認識が広がったのではないかと考えられる。しかし位置関係はまだ混乱がみられ、確定されていなかったことは注目される。17世紀には、文献上では1696年の安龍福の証言により、1728年の『肅宗実録』に于山島が松島とあり、鬱陵島・于山島はともに朝鮮領であるとされているが、絵図上では、鬱陵島や于山島の位置が正確に把握されていなかったということが指摘できる。

3) 18世紀

18世紀に入ると、従来のような鬱陵島・于山島二島の記載事例だけでなく、鬱陵島を西側、于山島を東側とする絵図がみられることとなる。そうした記載が初めてみられるのは、18世紀中期に刊行された鄭尚驥による地図帳『東国地図』所収の「江原道図」である【25】。鄭尚驥（1678～1752）は、縮尺の概念を地図に適用し、距離を正確に記載するように修正したという点で、朝鮮地図史上、重要な人物の一人である。しかし、于山島の位置は、鬱陵島の東側に書かれているとはいっても、鬱陵島のすぐ脇に記載されていることが重要である。しかもこの地図では、「于山島」と島名が記されているだけである。したがって、こうした記載をもって、于山島を現在の竹島として正確に記載しているとするのは誤った解釈であるといえる。

18世紀中期から後期には作成された『輿地図』や『海東地図』といった地図帳が作成、刊行された。鄭尚驥の地図の影響を受けたと考えられる。それには「天下図」₁、「中国図」₁、「日本国図」₁、「琉球国図」₁、そして道別図などを収録しており、朝鮮国内で国際的な地図帳が刊行され、国際的な地理認識がさらに広まっていったとみられる。

そのなかでも18世紀末期に作成された『輿地図』のうち、「我国? 図」【32】では、鬱陵島を西側、于山島を東側としているが、于山島は鬱陵島のすぐ脇の記載となっている。同じく『輿地図』所収の「朝鮮・日本・琉球国図」【33】では、朝鮮半島だけでなく、日本列島や琉球が描かれている。日本海（絵図では「東海」）には、「鬱陵島」のみが描かれ、于山島はない。日本列島の記載が、蝦夷まで含めて、朝鮮半島・対馬の南部に描かれているのが注目される。さらに、18世紀中期に作成された『朝鮮地図並八道天下地図』所収の「日本国図」をみると、石見、備後、備中など中国地方の国が島として描かれるなど、かなり不正確な内容となっている。おそらくこれは中世の行基図をもとに作成されたと考えられ、そうした地理的認識が18世紀中期に至っても朝鮮国内に存在していたことが注目される。こうしたことから18世紀では、国際的な地図帳が刊行されるものの、朝鮮半島東部の日本海については、地理的に正しく認識していなかった可能性がある。これは、安龍福が17世紀末期に鬱陵島などを経由して隠岐、そして因幡へやってくるものの、朝鮮では1417年から始まった鬱陵島への入島・居住を禁じた「空島政策」が続いていたことが関係していると考えられる。

さらに、18世紀中期に作成された地図帳『海東地図』には「鬱陵島図」が収録されていることが注目される【57】。それによれば、地形や河川、船の停泊場所、集落跡、石碑、墓地、竹田の分布などが記されている。島の東には「刻石立標 倭船倉可居」といった記載があり、かつて日本人がこの島に来島し、倉を建てるなど経済的活動をしていたことが分かる。1696年に江戸幕府は鬱陵島の渡航を禁じており、絵図は文献上の記載とも符合する。また、絵図上には、「生鯨」をはじめ、鬱陵島の様々な産物を記していることも注目される。こうした絵図上の記載は、島を実際に踏査して作成したことを示していると考えられる。さらに、この絵図では于山島の記載もみられる。しかしながら、鬱陵島東部のすぐ脇の島に、「所謂于山島」と記しているのである。これは、現在の地図と見比べても分かるように、塚本（1980）の分析と同様に、鬱陵島の属島である、現在の竹嶼にあたるといえる。実際の調査をふまえ、この時期にようやく「于山島」の位置の比定が行われた。

その結果、于山島の位置は、現在の鬱陵島脇、東側にある竹嶼とされた。そして、その後は朝鮮全図においても「于山島」の表記が鬱陵島の東となったと考えられる。

しかしその後も朝鮮全図では、鬱陵島一島のみ記載や、二島の記載でも位置が異なるものがみられたことから、いまだに地理的混乱がみられたことも重要である（なかには鬱陵島を南側とし、于山島を北側とし、島名も「子山島」とする絵図もみられた『輿地図』所収「江原道図」【29】）。したがって、文献上では、1770年の『東国文献備考』に、「輿地志に云う、鬱陵・于山は皆于山国の地で、于山は即ち倭の所謂松島である」としているが、絵図をふまえると、ここに記された于山島が現在の竹島であるかどうかは再検討が必要であるといえる。

4) 19世紀初期・中期

朝鮮全図では、18世紀の『東国地図』の影響を受けた、すなわち、鬱陵島を西側、于山島を東側とし、鬱陵島のすぐ脇に記す絵図が引き続き作成、刊行された。しかしその一方で、19世紀初期でも、「東国地図」【36】のように、鬱陵島を東北側、于山島を西南側とするような、両島の位置が異なる、絵図（木版）が刊行されていたことも重要である。

19世紀では、金正浩により1861年に作成された「大東輿地図」【51】が刊行されたことが注目される。これは1834年に金正浩が作成した「青邱図」【49】をさらに発展させたもので、約16万分の1の地図で、22帖で構成された大縮尺の地図である。山と河川が詳細に記載され、道路を直線で表記し、距離が分かるようにしてある。また行政区域の境界を記している。さらに都邑（官衙）・城郭・鎮堡・駅・倉庫・牧所（牧場）・烽燧（のろし）・陵寢（王陵）等も記されている。このように、「大東輿地図」は朝鮮地図史上でも重要な地図であるといえる。「大東輿地図」にはいくつかの系統があることがすでに指摘されており（楊普景・渋谷鎮明、2003）、鬱陵島・于山島の記載も系統によって異なる。そのうち、ソウル大学奎章閣所蔵本（吉田光男、1994）は木版で、鬱陵島の記載がある。先に記した18世紀中期の『海東地図』収録「鬱陵島図」【57】と比べると、山の稜線・河川が記されているので、その後さらに現地調査をした可能性があると思われる。しかしながら于山島の記載はみられない。一方塚本（1980）によれば、国立国会図書館所蔵本（筆彩）では、鬱陵島・于山島二島が記載され、鬱陵島はソウル大学所蔵本に比べると、文字による説明が多い。また于山島は鬱陵島の東側そばに描かれており、その位置から現在の鬱陵島脇の竹嶼にあたりと考えられる。このように、より正確な「大東輿地図」であっても、于山島の記載がなかったり、鬱陵島とその付属島である竹嶼しか描かれていなかったことが指摘できる。

5) 19世紀後期から20世紀初期

この時期には、1876（明治9）年日朝修好条規が締結され、1882年には鬱陵島の空島政策が終わり、開拓するために植民政策が提案された、日本と朝鮮との関係や、鬱陵島の政策に大きな変化があった時期である。

19世紀後期刊行の『鰐域地図』所収の「大朝鮮国全図」【46】は、鄭尚驥の『東国地図』の影響がみられ、鬱陵島を西側、于山島を東側で、鬱陵島のすぐ脇に記している。また于山島の北側には「東洋中日本諸島」と記していることが注目される。以前と同様に、于山

島は鬱陵島属島である竹嶼であり、その東側は日本の諸島であることを明記している。つまり、于山島の東側は朝鮮と日本との境界であると指摘しているとみられる。

さらに、1882年には鬱陵島の空島政策の終了に伴い、李奎遠による鬱陵島調査が実施された。「鬱陵島外図」【60】や「鬱陵島内図」は1882年頃その調査に基づき李奎遠が作成したものである。下條(2004)によれば、「鬱陵島検察使日記」に「松竹于山等の島、僑寓の諸人、皆傍近の小島を以て之に当てる」とあり、「鬱陵島外図」の記載の属島は東側の「島頂」と「竹島」のみであることなどから、現在の地図に比定すると「島頂」は観音島、「竹島」は竹嶼であるとしている。つまり鬱陵島とその属島しか描かれていないことが分かる。

日清戦争(1894～95)の後となる、1899年の「大韓全図」【54】は大韓帝国の学部編輯局が刊行した地図で、朝鮮全図では初めて経緯度が表記されたものであるが、この地図でも、これまでと同様に、鬱陵島を西側、于山島を東側で、鬱陵島のすぐ脇に記している。下條(2004、p.115)によれば、同じく1899年に刊行された『大韓地誌』では、朝鮮の東限は鬱陵島(東経130度)としている。現在の竹島(独島)の経度は東経131度52分であり、朝鮮の東限は地図、そして文献でも鬱陵島であったことが確認される。

さらに、1900年頃、同じく大韓帝国の学部編輯局が刊行した「大韓輿地図」【55】では、先に記した「大韓全図」の記載を踏襲し、同じく鬱陵島を西側、于山島を東側で、鬱陵島のすぐ脇に記している。1900年10月の大韓帝国勅令41号により、鬱陵島を江原道の郡に昇格し、同時に石島も韓国領とした。韓国側はこの石島こそ独島であるとしているが、この地図には、鬱陵島の南部には島の記載があるものの、石島、そして独島の記載はみられないのである。

3. おわりに

以上の分析から、朝鮮古地図にみる鬱陵島・于山島の記載についてまとめると以下のようになる。16世紀までは鬱陵島＝于山島で一島であるのと、鬱陵島と于山島二島が存在し、于山島を西側、鬱陵島を東側とする絵図がみられた。つまり、朝鮮半島の東側の日本海に、島が存在していたことは認識していたものの、正確な位置については認識していなかったといえる。17世紀には、鬱陵島＝于山島、つまり一島であるというのは次第に消え、鬱陵島・于山島二島が存在する地理的認識が広まっていた。しかし、于山島を西側、鬱陵島を東側としたり、于山島を北側、鬱陵島を南側とするなど、日本海に二島が存在していたことは認識していたものの、正確な位置については認識していなかった。

18～19世紀には、同様に、鬱陵島・于山島二島が存在するものの、次第に鬱陵島を西側とし、于山島を東側とする絵図が増えていった。しかしながら、分析の結果、于山島の位置は、鬱陵島東岸の属島、すなわち現在の竹嶼に比定された。これは朝鮮の鬱陵島調査によるものであった。その一方で、島の位置に混乱がみられる絵図も引き続き刊行された。さらに、18世紀には日本の位置や形も正確に捉えておらず、鬱陵島東側の日本海には、地理的認識は及んでいなかったと考えられる。さらに、19世紀末期～20世紀初期には、経緯度が入った朝鮮地図が大韓帝国によって刊行されるが、于山島の比定場所はそれまでと変わらず、鬱陵島は西側、于山島は東側で、鬱陵島のすぐ脇に記していた。朝鮮王朝から大韓帝国となり、日清戦争などの国際的な紛争が起こった後でも、朝鮮半島東側の地理

的認識は以前と変わらなかったと考えられる。

下條（2004、p.108）によれば、于山島について「朝鮮社会には「于山島は日本の松島である」とする常識が拡散していった」、「その常識と、現実の地理については別物である」、「于山島が実際どこにあるのかは、当時、誰も関心をもって調査していなかったのである」などとしている。本報告では朝鮮の古地図の悉皆的な分析を行なったが、その分析においても、于山島については、17世紀までは位置を比定していなかったこと、18世紀になりようやく位置が比定されるものの、鬱陵島東岸に浮かぶ属島、竹嶼としていたこと、そしてその比定場所は20世紀に入っても変わっていなかったことが明らかとなった。つまり、朝鮮は、絵図・地図上では、現在の竹島（当時松島）の位置を正確に把握していないし、朝鮮領としても認識していなかったことが分かる。したがって文献上でみられる、1696年の安龍福の証言、そして1728年の『肅宗実録』に于山島が松島であり、鬱陵島・于山島はともに朝鮮領であるといった記載についても、鵜呑みにせず、史料的に再検討する必要があると考えられる。

なお、本報告では、鬱陵島と于山島の記載を中心に検討を行い、済州島や巨濟島など朝鮮の他の島については検討を行なわなかった。絵図・地図の史料上の記載について考察するには、他の島についても検討が必要であると思われる。また朝鮮地図は、韓国だけでなく、日本国内にも多数所蔵がみられる。悉皆的な分析のためには、日本国内に残る絵図・地図についてもあわせて検討が必要である。こうした点については今後の課題としたい。

【文献】

- 川上健三（1966）：『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院
塚本 孝（1980）：竹島関係旧島取藩文書および絵図（下）、レファレンス
昭和60年5月号
李 燦（1991）：『韓国の古地図』（韓文）、汎友社
吉田光男監修（1994）：『大東輿地図』（復刻、初版1936年）、草風館
楊 普景（2003）：15～17世紀、朝鮮の世界地図と世界認識、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観ニューズレター第3号
楊 普景・渋谷鎮明（2003）：日本に所蔵される19世紀朝鮮全図に関する書誌学的研究 - 『大東輿地図』および関連地図を中心に - 、歴史地理学45-4
下條正男（2004）：『竹島は日韓どちらのものか』、文藝春秋
金 学俊（2004）：『独島竹島 韓国の論理』、論創社